

かささぎ通信 第65号

2018年 2月 9日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一八年一月の「森三郎の作品を読む会」では、「雪だるまのホワイトくん」と「狐」を読みました

一月は刈谷でも雪が降り空気の冷たい日が続きました。

「雪だるまのホワイトくん」は、季節感ピッタリの作品でした。実は広島島の「鈴木三重吉『赤い鳥』の会」発行の「鈴木三重吉『赤い鳥』通信 1994春号」(No.28)に、「森さんを偲んで」という特集があり、その中で三郎さんの長男・春途さんが「父三郎の思い出」という寄稿をされています。「子供の頃、父はよく寝る前フトンの中で、本を読んでいた。子供の頃、父はよく寝る前フトンの中で、本を読んでいた。父の作品では、『雪だるまのホワイトくん』などを思い出すことができる。」と書かれています。この童話が『日本名作童話4年生』(坪田譲治等編、金の星社、昭和32年)に載っていることを知り、皆で読みました。

子どもたちは町角で大きい雪だるまを作り、明日の朝、この雪だるまに名前を付けようと言って、家に帰ります。雪だるまは一晩中そこに立っただけで、町角で起こる様々な出来事を見ながら朝を迎え、子どもたちから「ホワイトくん」という名前を付けてもらいました。

この話はいわば町角での定点観測ですが、これと反対に十二年もの間、四つ辻の片すみに立っただけの赤いポストが、一晩だけその場を離れて冒険をする話が「赤いポスト」(原作ローズファイルマン、『赤い鳥』昭和6年9月号)でした。「赤いポスト」は三郎さんにとって心に残る作品だったということではないでしょうか。会員からは「赤」と「白」という対比も面白いという声も聞かれました。

「雪だるまのホワイトくん」が発表された昭和32年は長男の春途さんがちょうど小学校4年生の時です。三郎さんの、子どもたちに伝えたい思いが読み取れました。

「狐」(『赤い鳥』昭和7年10月号)は『森三郎童話選集 かささぎ物語』(刈谷市教育委員会編、一九九五年)の冒頭に掲載されている作品です。これまでに読んできた『赤い鳥』掲載の森三郎作品全一一九編の中には、何かに化けたり化かしたりする動物が登場する作品は九作品ありました。動物の種類は、きつね(四回)・たぬき(四回)・むじな(二回)・いたち(一回)です。きつねは、「人形しばぬ」(昭和6年5月号)、「目ぐすり」(昭和7年3月号)、「狐」(昭和7年10月号)、「狐の提燈」(昭和11年8月号)の四作品に登場しています。

「狐」は次のような話です。村の庄屋の家へ鶏を盗みに行った父狐の身を案じた子狐が様子を見に行き、偶然庄屋の家に入った泥棒が金包みを隠す場面を見届けます。子狐はその金包みを持ち帰って庄屋に渡します。そして親孝行な子狐に免じて、捕まっていた父狐も許されいぞ。お腹がすいたら、いつでも家へこい。」と諭される場面に、「何だかホッとする」という感想が、集まった会員の中から聞かれました。

この話の類話として、いたずら狐に「今度から黙ってとるな」と諭して助けてやる「こんすけ狐とじいさま」という『宮城県の民話』(宮城県教育委員会、一九八八年)を紹介してくれた会員もいました。

『赤い鳥』の中の「狐」の話は、備中の笠岡在の話という設定になっていますから、昭和七(一九三二)年当時、森三郎は岡山の民話か何か、資料とする話を目にしていたのかもしれない。

◆ 「かささぎ通信」第63号(下段)で、森三郎の「鐘」の原作、小泉八雲の文章を引用しましたが、would have leaped in after her は仮定法過去完了(過去の事実の反対の想像を表現)で、after her は「つかまえるために」と、理解できるといふ指摘が鈴木哲氏よりあり、一月の会では原文との比較をして、文意の再確認をしました。

次回「森三郎の作品を読む会」(第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催)平成30年3月9日(金)午後1時半〜3時半

「鼓大名」「帽子にかけたクロネコ」「お染」(『森三郎童話選集 かささぎ物語』)